

日本考古学における民族考古学の歩み

——土器研究を中心として——

長 友 朋 子

はじめに

民族考古学は、日本考古学では1990年頃に再度注目されるようになった分野である。筆者が関心をもち始めたのは、小林正史氏が精力的に東南アジアで民族調査を行おうとしていた時期であった。小林は、プロセス考古学者として著名なロングエーカーのカリング調査に参加し、方法論を学んでいた筆者も2003年～2008年の調査に加えてもらい、その後独自に調査をおこなうようになった。

その頃、民族考古学はそれほど主要な研究法とは認知されておらず、土器研究分野で民族調査をする考古学者は少なかった。当時は、考古資料に向き合って観察し、そこから論を組み立てるのが正当な方法という考えが根強かった。文化的に脈絡が異なる、他地域の民族事例を考古資料に援用する民族考古学の方法論は、明治時代のいわゆる土俗考古学を思い起こさせる部分があり、反発もあった。しかし、現在は、論理的に手続きを踏めば、民族学的成果を援用できることが理解され、民族考古学も一つの研究方法として確立されつつある。そこで本稿では、土器研究を中心として、これからの民族考古学の研究の方向性について整理する。次に民族調査の方法と考古資料への援用について、私自身の調査と研究から述べてみたい。

1. 日本考古学における土器研究に関する民族考古学の流れ

(1) 萌芽期：1990年より前

1970年代には、土器研究において、土器製作の方法の多様性を示すため、佐原真により世界の民族事例が紹介され示唆に富む資料の提示がなされた(佐原1970)。しかし、民族誌を用いた研究(鹿野1941、角林1978、周1979、森1980)や民俗資料からの考古資料の用途の類推などは見られたものの、考古学への民族学的研究成果の援用や本格的な考古学者による民族調査がなされるようになるのは、プロセス考古学の中位理論としての民族学的研究の導入以降になる。

(2) 導入期：1990～2009年

民族考古学や生態人類学を重視したプロセス考古学のアプローチは先史考古学において積極的に導入されており(佐藤1990, 1992)、考古学者が自らフィールドに出て調査をおこなう研究も始まった(浅川・村田・大貫・栗原・坂田・楊・黄1997他)。

土器研究に目を向けると、米国で文化人類学や生態人類学に深く関わるプロセス考古学を学んだ研究者らが、日本へ帰国し研究成果を公表し始めたのは1990年代後半以降である。後藤明は著書『民族考古学』において民族調査の方法を明示しつつ、土器も含め調査事例をあげつつ物質文化と人

間行動の関係を読み解いた（後藤 2001）。また、小林正史は、土器製作工程間の連鎖を明らかにするなど、フィリピンのカリングで調査した土器研究の成果を示した（小林 1996・2000）。後藤明はハワイ大学、小林正史はアリゾナ大学で指導を受けた研究者である。陶磁器研究者の檜崎彰一が米国の研究者らと民族調査事例を紹介し（檜崎・Leedom・Louise 1994）、その後、東南アジアの土器製作村の網羅的な分布図を作製した点（檜崎・Leedom・Louise 2000）も特筆される。小林らはこの分布図を基礎に調査をすすめることになった。

一方、日本にいながら文化人類学に関心を持ち、東南アジアへフィールドに出た考古学者もいた。大西秀之は 1996 年 3 月～7 月にフィリピン・ルソン島で現地調査をおこない、土器製作村で土器製作者からその知識や技能を習うことにより、自らの身体的側面に焦点をあてつつ、現地の人々の身体が有する知識や技能を形作った経験に迫るという研究をおこなった（大西 1998a・b・2007・2014）。また、考古学者ではなく、文化人類学の研究者が土器製作技術に焦点をあてた研究もみられた。金子守恵は、1998 年 11 月～2003 年 3 月までの間に断続的に約 2 年間アフリカエチオピアのフィールドで調査をおこなった。結婚を機に移住した土器製作者の女性たちが、性質の異なる在地の土で素地作りや製作技法を巧みに変化させながら、上手く適応する様相をとらえ、製作者のライフヒストリーを土器技術から読み解こうとした（金子 2005・2006・2007・2011）。金子は多角的な視点から詳細な調査をおこなっており、その中で、微妙に形態や大きさの異なる同じ種類の土器を、コーヒー用とお湯用、あるいは客用と家族用などのように使い分けることも報告されている（図 2）。これが 1 世帯あたりの土器個数にも反映されると推測され、最も頻度の高い土器数が 12 個であったのは興味深い（図 1）。また、土器の耐久年数は長いもので 5 年、短ければ 3 か月と、土器の寿命の短さがうかがえる（表 1）。

大西と金子は土器製作技術を身体技法という側面から検討しようという視点が鮮明であり、ボアズが「運動習慣」と名付け、モースが「身体技法」として伝統的な方法で身体を用いることを文化と関連づけた文化人類学の議論（M. モース 1976）が基礎となっている。後述する定着期にも、身体に焦点をあてた研究がおこなわれるが、効率よく土器を形作るた

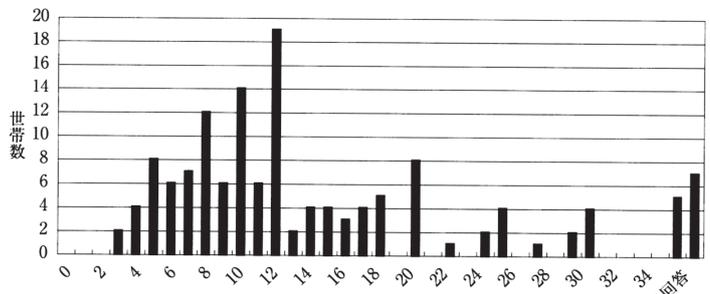


図 1 1 世帯あたりの土器の個数（金子 2011）
（n = 135、トルタ小学校のアンケートより作成）



図 2 コーヒーを沸かす土器（左）とお湯を沸かす土器（右）（金子 2011）

表 1 6 世帯が所有する土器の耐久期間（金子 2011）

低地・高地	低地			高地	
	村名	S 村	G 村	M 村	
世帯名	C	D	E	F	G
世帯成員数	7 人	2 人	3 人	4 人	4 人
方名					
ブン・ティル（沸）	1 年	n.d.	2 年	n.d.	5 年以上
ブン・ティル（注）	5 か月	n.d.	n.d.	n.d.	5 年
エケナ・ティル	2 年	1 年	n.d.	2 年	5 年・1 年
モサ・ティル（小）	1 年未満	2 年	2 年	1	1 年未満
モサ・ティル（大）	2 年	n.d.	n.d.	n.d.	5 か月
ガビジャ・ティル	2 年	4 年・1 年	n.d.	1 年未満	1 年未満
ガビジャ・ティル（大）	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	5 年
シカ・ティル	3 か月	3 か月	4 年	4 年・1 年	n.d.
シカ・ティル（小）	n.d.	n.d.	n.d.	2 年	n.d.
ティマ・ティル	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.

* S 村、G 村に居住する世帯の近隣には、土器職人が暮らしている

めにどのように身体と道具が使われているかという機能的な部分にも関心が向けられており、文化を形作る身体という大西や金子の視点とは異なる部分も多い。

さらに、前述の通り小林正史らは2004年から農村で土器製作がおこなわれているタイを中心としてフィールドに入る。考古学者が組織的におこなう土器研究に焦点をあてた民族調査が本格的に始まった。これを機に、チームの一員であり、日本考古学で窯や土器の研究を進めていた徳澤啓一、北野博司、筆者や、農耕社会の開始に関心をもつ中村大介、庄田慎矢は、考古学研究への援用を念頭においた民族調査と民族考古学的研究をおこなうことになる。また、認知考古学を専門とする時津裕子と九州の弥生土器研究を精力的に進める中園聡が、タイの調査を開始したのもこの時期だった。文化人類学と考古学の学際的研究や、米国のプロセス考古学の方法論としての民族考古学の導入が、日本考古学の研究者らに刺激をあたえ始めた。

2000年代までの研究成果の一部は、漁労活動を研究テーマに考古学と人類学の学際的研究をおこなう小野林太郎や、オセアニアをフィールドとする考古学者石村智、台湾の民族調査を精力的におこなっていた角南聡一郎をも含めて、後藤明編集の『土器の民族考古学』にまとめられた(後藤編2007)。その章立てをみると、「土器製作技法と身体」、「社会的生産物としての土器」の2部に分かれており、当時の土器研究における民族考古学の研究視点と関心テーマをうかがうことができる。

(3) 定着期：2010年以降

2010年以降、土器をどのように製作し使用していたのかなど、考古資料を読み解くための民族調査成果が論文や学会発表で多く示された。考古学者が考古学的な視点で本格的に民族調査を始めて一定の時間が経過し、その成果が続々と公表されはじめたのだ。土器製作技法に関する事実報告(北野2012, 徳澤・北野・中村・平野2012, 徳澤・片山・張2012, 中村・池田・長友2014)とともに、製作工程(長友2007, 北野・小林2010, 長友2010)、世代間比較(徳澤・小林・北野・三坂2010, 徳澤2011)、地域差や時期的変化、民族差(長友・中村2011, 徳澤・中村2011, 小林2012, 徳澤・平野・北野・中村2012, 徳澤・Sureeratana2012, 徳澤2012)、分業(長友2007, 徳澤2013, 小林2015)に関する研究などが発表されており、このようなテーマが関心の主たるものであった。

叩き技法に用いられる当て具は考古資料として検出することができるため、製作道具も注目された(庄田2007他)。なかでも、一人の製作者が工程別にどのように叩き板と当て具を使用するかを詳細に記録した北野博司の研究は興味深い(北野2012)。モーイオイの製作に7つの叩き板と2つの当て具、モーヌンの製作に6つの叩き板と1つの当て具の使い分けが観察され、製作道具は微妙に使い分けられていることが示された(図3)。さらに、製作村によって、溝の有無により叩き板を使い分ける方式(ウボンラチャタニ・ドンチック村)、溝をもたない叩き板のみを使用し重量で使い分ける方式(マハサラカム・モー村)、すべて有溝の叩き板を用い、溝の密度とすり減り方で使い分ける方式(ラオス・ブドン村)があることを東北タイで確認した。一方、平川ひろみは、東北タイとは製作工程の異なる、北タイで製作道具の使用を検討し、製作者の所有する叩き板は非常に多いものの(図4)、1個の土器に使用する叩き板は1~2個程度と数の少ないことを指摘した(平川2016)。

野焼き土器だけでなく、窯にも調査がおよび(徳澤・平野・北野・中村2012, 北野・徳澤・中村2013, 平野・Nguen・徳澤2014, 中村・徳澤・北野2014, 中村・池田・長友2014)、野焼きと窯焼きがどのように関係するかにも関心が払われた(徳澤・中村2011, 中村・長友2017)。また、土器製作技術を有する農耕民の移住にも目が向けられる(北野2014)。図7は移住関係のある村を図示したものである。

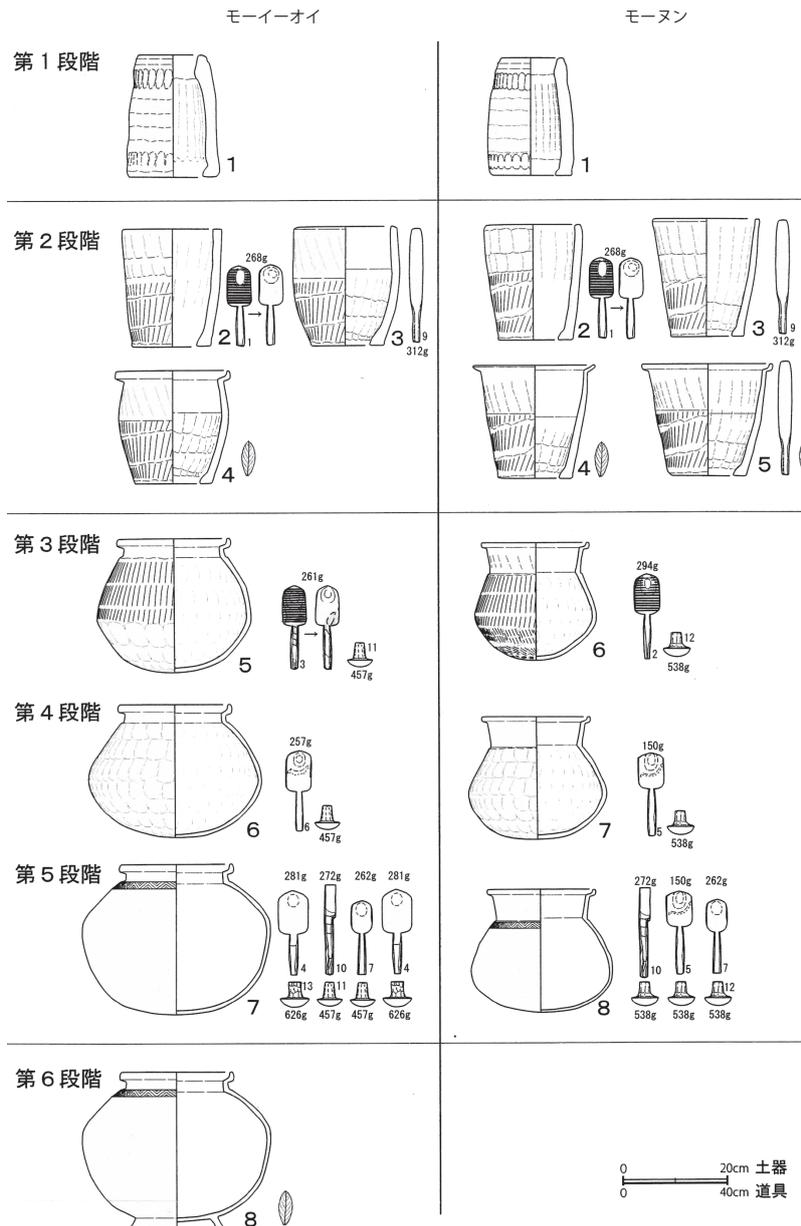


図3 東北タイ・ドンチック村における土器成形工程と道具 (北野 2012)

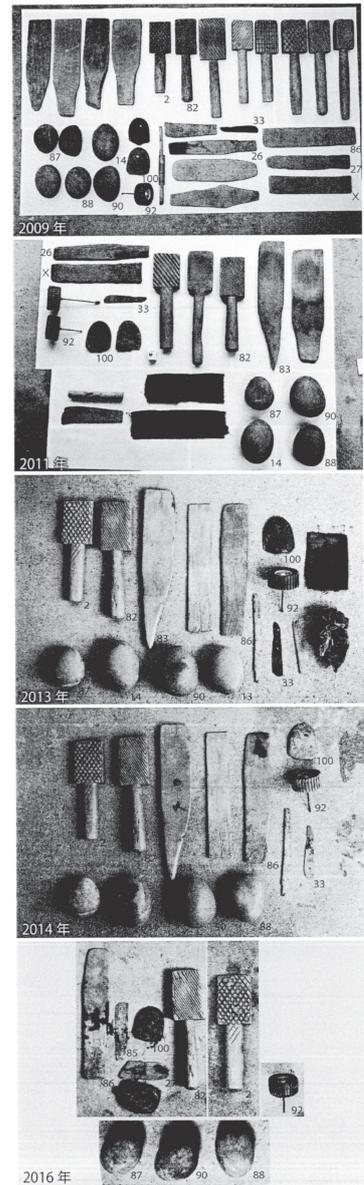


図4 北タイ・ハンケオ村で使用されていた道具 (平川 2016)

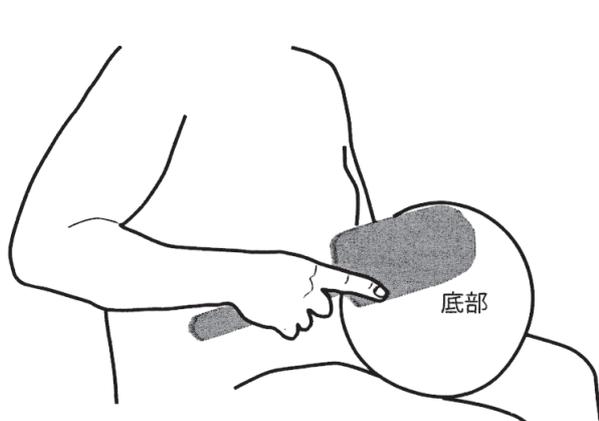


図5 手持ち叩きの姿勢と叩き板の持ち方 (北野 2012)

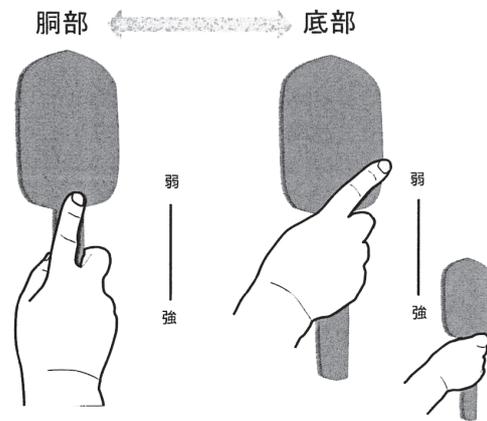
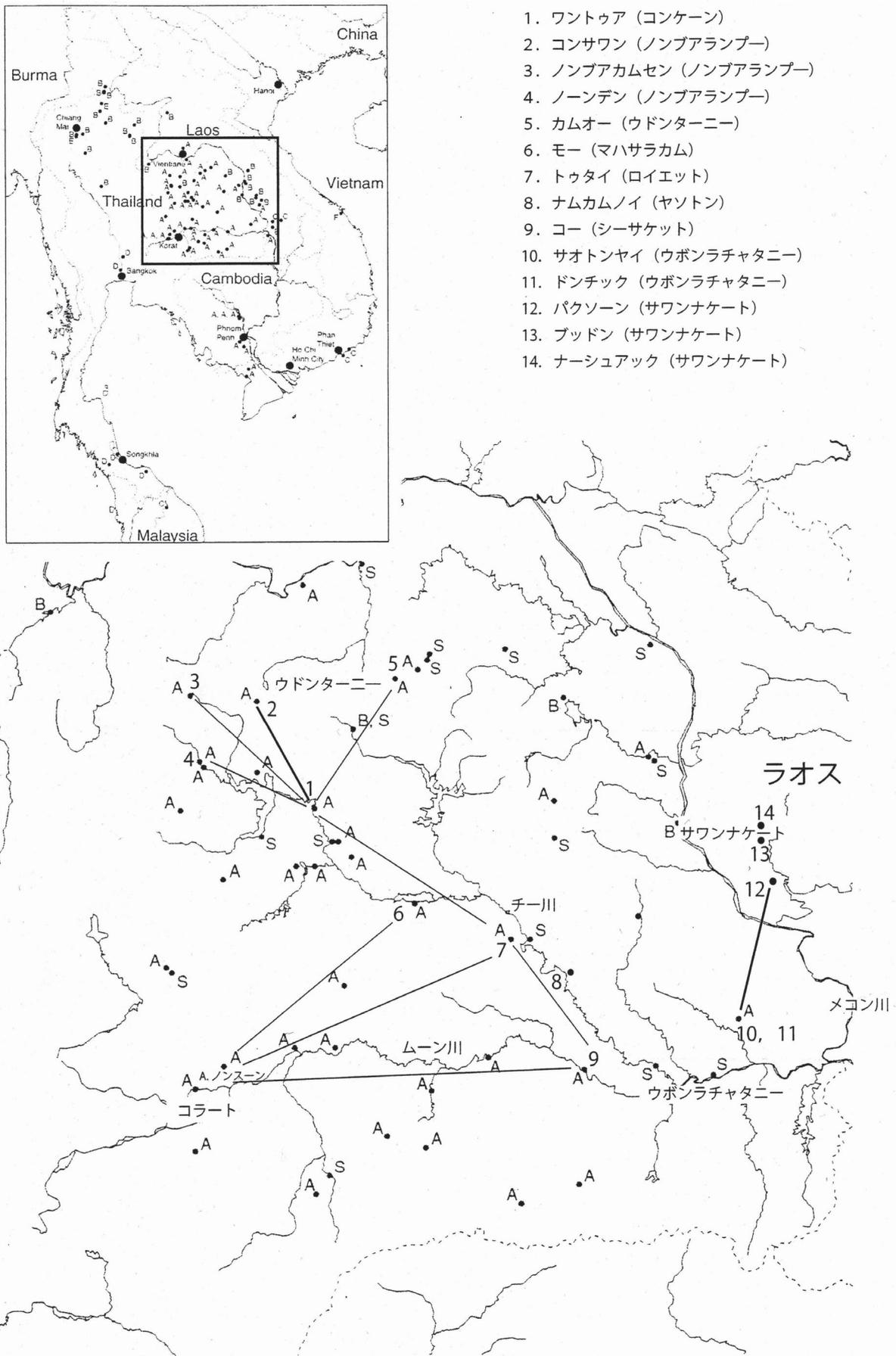


図6 成形部位と強弱の違いによる叩き板の持ち方の違い (北野 2012)



1. ワントウア (コンケー)
2. コンサワン (ノンブアランブー)
3. ノンブアカムセン (ノンブアランブー)
4. ノーデン (ノンブアランブー)
5. カムオー (ウドンターニー)
6. モー (マハサラカム)
7. トウタイ (ロイエット)
8. ナムカムノイ (ヤソトン)
9. コー (シーサケット)
10. サオトンヤイ (ウボンラチャタニー)
11. ドンチック (ウボンラチャタニー)
12. バクソーン (サワンナケート)
13. ブットン (サワンナケート)
14. ナーシュアック (サワンナケート)

図7 東北タイ・ラオスの土器製作村と移住関係 (北野 2014)
(榎崎ほか 2000 に加筆)

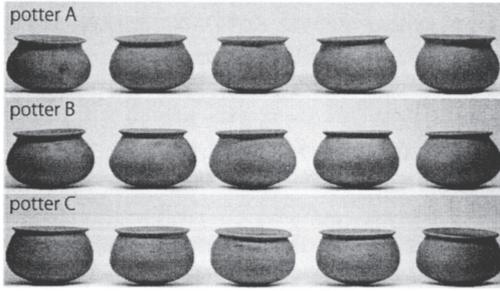


図8 東北タイ・ハンケオ村で2012年に製作者A・B・Cにより製作された土器(平川2013)

表2 叩き回数と所用時間(平川2013)

製作者	調査年	小区間	タタキ回数	所要時間(秒)	
potter A	2009	I	17	5.6	
		II	16	5.1	
	2012	I	14	4.7	
		II	13	4.7	
potter B	2009	III	26	8.9	
		IV	32	10.6	
		2012	III	25	7.7
		IV	31	10.0	
potter C	2011	V	9	5.0	
		VI	8	3.5	
		2012	V	11	5.0
		VI	10	4.3	
		VII	12	4.6	

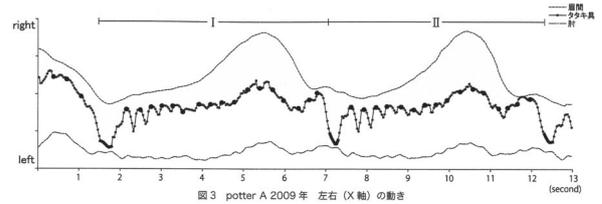


図3 potter A 2009年 左右(X軸)の動き

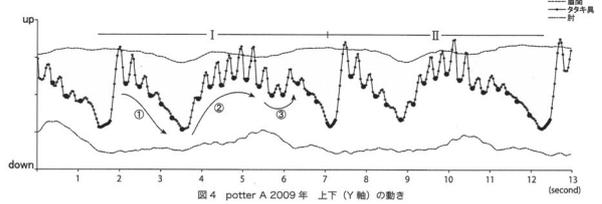


図4 potter A 2009年 上下(Y軸)の動き

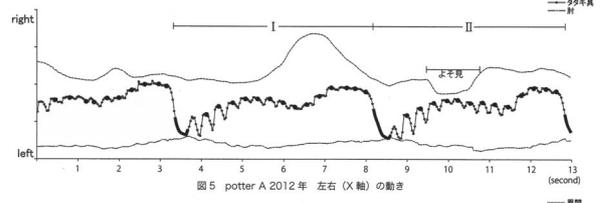


図5 potter A 2012年 左右(X軸)の動き

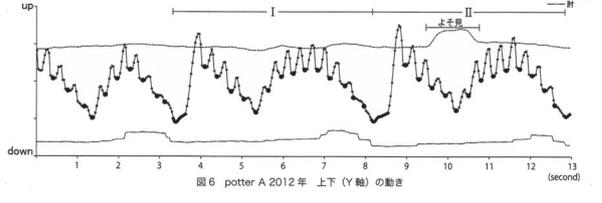


図6 potter A 2012年 上下(Y軸)の動き

図9 製作者Aの2009年と2012年の叩き動作(平川2013)

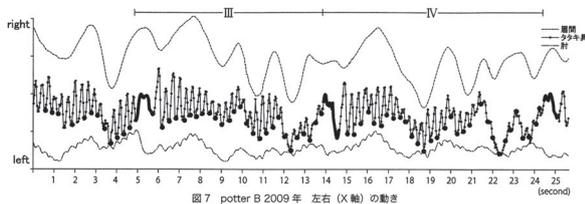


図7 potter B 2009年 左右(X軸)の動き

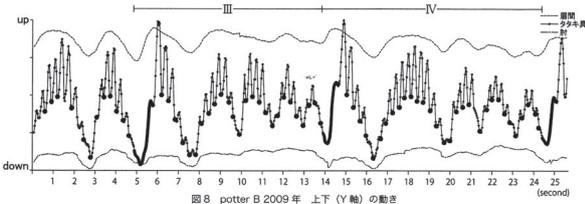


図8 potter B 2009年 上下(Y軸)の動き

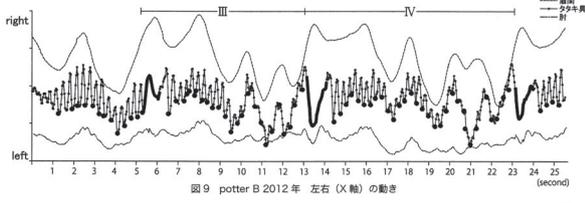


図9 potter B 2012年 左右(X軸)の動き

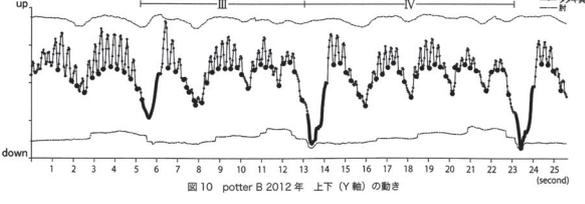


図10 potter B 2012年 上下(Y軸)の動き

図10 製作者Bの2009年と2012年の叩き動作(同上)

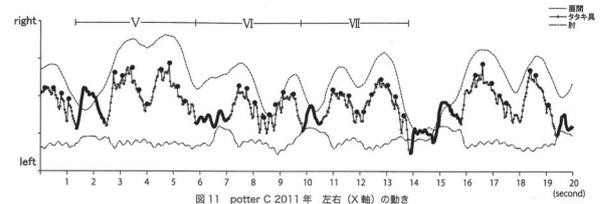


図11 potter C 2011年 左右(X軸)の動き

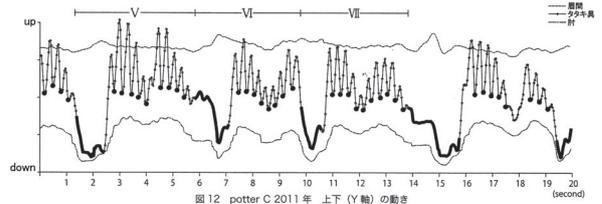


図12 potter C 2011年 上下(Y軸)の動き

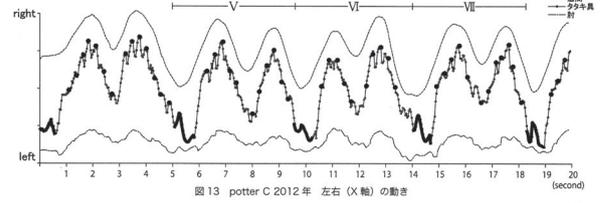


図13 potter C 2012年 左右(X軸)の動き

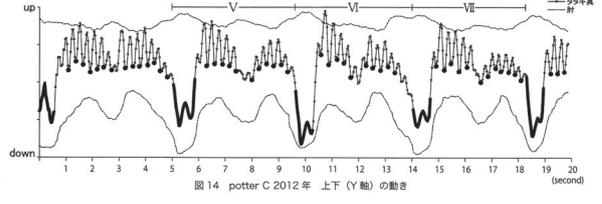


図14 potter C 2012年 上下(Y軸)の動き

図11 製作者Cの2009年と2012年の叩き動作(同上)

一方、中園らは身体技法や土器製作者集団と個人の識別、土器の胎土という視点に関心をもち、考古資料に適用する理化学的方法や計測方法を民族資料に用い、分析をすすめた（中園・平川・川宿田・太郎良・三辻 2012, 中園・太郎良・平川・川宿田 2012, 中園・平川・太郎良・川宿田 2013a・b, 中園 2014a・b, 中園・平川・太郎良・白井 2014）。これらの研究も、身体技法を意識した技術の説明や、埴輪における工人個人の特長など、考古学の研究動向と連動していると考えられる。ただし、土器製作者を観察してこそ得られるデータにも注目している。図9～11は、土器製作者の叩きの動作を記録したものである。熟練者A・Bと土器製作を開始して間もない製作者Cとの動きを比較した。

東南アジアの野焼き土器製作者は、農耕をおこないつつ農閑期に土器を製作する場合が多い。イネ科草燃料で覆う野焼きは、稲作と切り離せない関係にあり、日本列島においても稲作の開始とほぼ同時に覆い型野焼きの始まることが確認されている。そのため2010年代後半になると、土器使用に関する調査（小林 2011）だけでなく、米作りや米品種に調査がおよぶようになった（小林・外山・北野 2016, 小林 2016, 小林・外山 2017, 小林・外山・北野 2016, 小林 2018）。倉をキーワードに生業に関する民族調査を進めていた考古学者の細谷葵も、堅果類の加工に関する成果を記した（細谷 2016）。一方、土器製作具や素地に関する研究（平川・中園・川宿田 2016, 中園 2017a）も引き続き進められている。以上の研究の流れをふまえつつ、筆者の研究成果を示し、考古学研究への援用の具体例をみてみよう。

2. 土器製作村民族調査と研究成果

(1) 調査方法

考古学は長いスパンで社会の変化を読み取ることができるのが長所であるが、民族調査ではそれが難しい。一方で、民族調査は土器製作をおこなう人の動作を実際に観察でき、土器生産体制や社会的環境を、聞き取りを通じて直接調査をすることができる。つまり、考古学では遺跡や遺物を対象とするのに対し、民族調査では人を調査の対象にする点で大きく異なる。

遺跡を発掘調査するための手順と方法があるのと同様に、民族調査にも一定の調査方法がある。例えば、村の歴史を把握するためには、村を束ねている立場の村長に聞き取りをするという方法や、村人に複数人集まってもらい、皆に村の歴史を紡いでもらうことがある。しかし、人の記憶には限界があり、また諸々の理由で、返答者も必ずしも正確に答えようと思わない場合がある。また、インタビューを行う際、答えがあやふやだと思ふ部分は、できるだけ違う角度からも質問を投げかけ、答えの正確さを検証したり、異なる人に同様の質問をして事実誤認を防いだりする必要がある。

私が行ってきた土器生産の調査では、例えば製作土器数を質問する場合、「1か月にどれだけ作るのか?」といった聞き方では正確な数を把握できない。インタビューでは3日前程度の数を聞くにとどめ、目視で数を確認しながら、日を変えて複数回インタビューを行う必要がある。以下に、一例として筆者が実際に行った調査をみてみよう。

2003～2008年までタイ北部と東北部、中国南部雲南省西双版纳の土器製作村を中心に土器製作に関する民族調査を実施した。調査は、小林正史を隊長とし、北野博司、徳澤啓一、中村大介、中村真理恵、長友により実施された。調査手順は次の通りである。

①土器製作村の概略地図の作製と土器製作者の所在を確認

- ②インタビュー（cとdはインタビューフォームを使用し、聞き取り項目を統一）
- a) 村長への調査：村の歴史の聞き取り
 - b) 土器製作者グループへの調査：土器製作の歴史に関する聞き取り
 - c) 独立的土器製作者への調査：家族構成や土器製作による収入の家計における割合、土器製作の季節といった基本的な情報に関する聞き取り調査
 - d) 土器製作工程の観察：聞き取りと目視で確認し、毎日製作する種類と製作工程、個数を記録
- ③ビデオなどによる記録
- a) 製作技法の記録：ビデオ、写真、実測図で記録
 - b) 焼成の記録：ビデオ、写真、スケッチで土器の置き方や焼成時間を記録し、温度計で焼成温度を記録

同様の調査を土器製作の盛んな乾季（農閑期）と土器製作が停止あるいは少なくなる雨季（農繁期）の2回、それぞれ1か月間程度の調査を実施した。1か月間調査ができない場合は、現地のアシスタントに依頼し、インタビューフォームに記録してもらいつつ、1か月分の土器製作数や種類の確認調査データを作成した。最初は、土器製作に関する調査に焦点をあてていたが、その様相が理解できると、使用方法へも調査を広げた。その場合も、製作技法と同様に、使用に関するインタビュー項目を決めてインタビューフォームを作成し、一軒ずつ聞き取りを実施した。

以上のように実施した調査成果などをふまえた、筆者の研究を示し、民族学的研究と考古学への援用の具体例を提示したい。

(2) 民族学的調査成果の考古学への援用

a. 紐積み成形を基本とする土器の製作速度と生産（長友2007）

土器の技術体系を復元することは、単に製作者の作業工程の復元にとどまらず、これらの製作技術と深くかかわる環境や生産体制、專業度を推し量る作業にもなる。技術のなかでも、とりわけ迅速に製作可能な技術を獲得しているかどうか、大量生産への潜在性につながるため、生産体制や專業度に強く関わる部分であると推測される。考古学では、土器観察から製作技術を復元することはできるが、製作時間については直接読み取ることができない。一方で、民族事例ではそれを実際に調べることができる。そこでまず、弥生土器と同じく紐積み成形する民族事例を集め、技術および生産の諸要素を比較した。次に、土器一個を製作するのにかかる時間を把握し、どのような技術が土器製作時間の短縮に結びついているのかを明らかにした。

表3は弥生土器と同様、粘土紐積み上げをおこなう民族事例のデータである。これをみると、まず、①から⑥になるにしたがって、1回で焼成する土器の個体数が増加している点に注意される。また、土器の生産と消費の関係についてみてみると、①は自給用として製作、②は定期的な市場で販売、⑤は仲買人による土器を流通、⑥は大量注文を受けての生産である。製作期間については③では二か月のみであるが、⑤は通年（選択）、⑥も通年である。こうした内容から考えると、①から⑥になるに従い、より専門的な生産体制をもつ土器製作になっていくことがわかる。このような生産に関する基礎的なデータを念頭に置きながら、次に、技術的側面をみてみよう。

図12は、焼成前までの製作工程を模式化した図である（表3に対応）。タタキ技法に着目すると、①～②では使用されず、③～⑥では使用しているという点で区別できる。なお、③～④ではタタキ技法による変形はほとんどないので、⑤～⑥とも区別される。

表3 粘土紐積み上げをおこなう民族事例（長友 2007）

国	所在地	製作者の性	製作月	販売の有無	焼成回数/回	素地	焼成方法	焼成時間	参考文献
① ニューギニア	ゴノア村	男性		自給用	1個	混和材なし（小石混じり粘土）	開放型	不明	角林 1978
② カメルーン	北西部バメッシン グムベガン	男：儀礼用 女：炊飯用		定期的（8日に1日）に市で土器を販売	8個（屋内の場合）	砂+2種の粘土	覆い型（生草）	1~2時間	森 1980
③ 中国	欄輿	男性	9・10月のみ	不明	7個	混和材なし	開放型	不明	宇野 1974
④ 中国	海南島福報郷	女性	—	開放以前：甕と同容量の米と交換	4~30個	混和材なし	開放型（点火後藁をかぶせる）	10分	西谷大 1991
⑤ タイ	北部ライ・クアイ村	女性	通年、乾季のみの2択	仲買人が土器を買い、小売店などへおろす	8~100個	砂+粘土	覆い型（藁+灰）	5時間程度	調査データより（2005年）
⑥ 中国	雲南省西双版纳タイ族自治州曼斗村	女性	通年	注文を受けたら製作（仲買人いない）	600個	混和材なし	覆い型（藁+泥）	一晚	聞き取り調査より（2006年）周 1979, 『考古』 1977, 徳澤他 2006

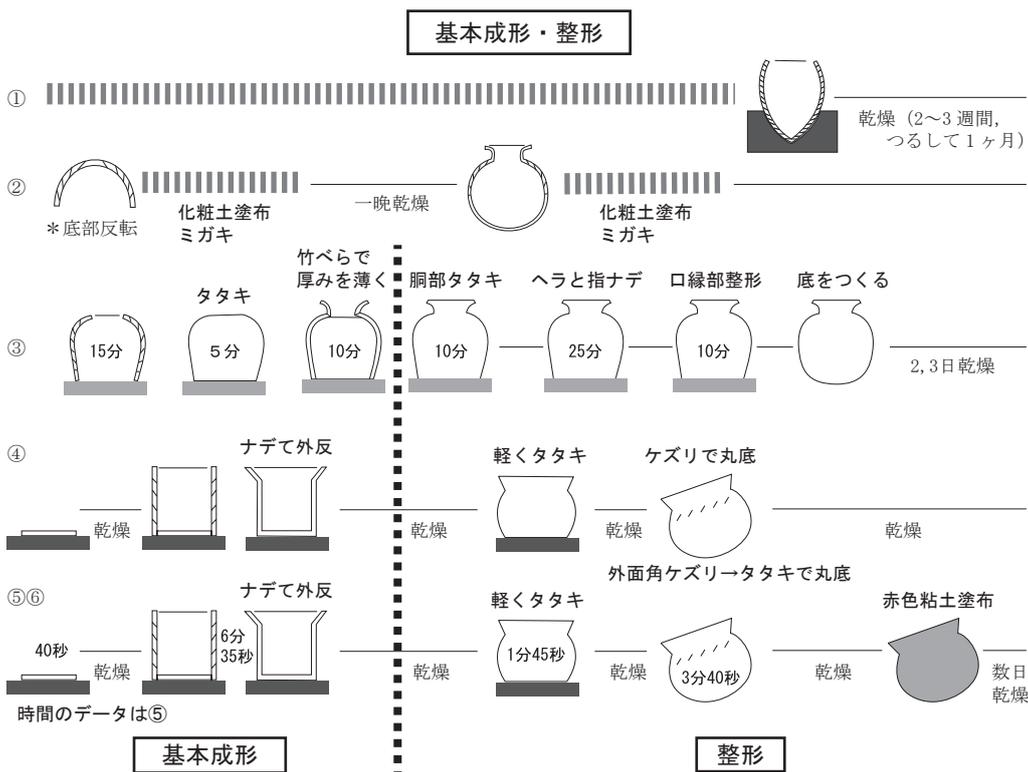


図12 紐積み成形の民族事例（長友 2007）

タタキ技法なし

- ① 直径1~1.5cm くらいの細い粘土紐を数本作っておき、巻上げを始める。内面は接合のたびにナデ調整を施し、外面はまとめて調整する。1個の土器を完成させるのに、半日かけて粘土紐を接合しながら積み上げる。その後何の手も加えないので、粘土紐を積み上げた形がそのまま完成形態

になる。完成した土器は台の上で2～3週間、屋内で吊した状態で約1か月間乾燥させる。

- ② 形に添って粘土紐を積み上げ、その後、化粧土の塗布とミガキ調整をする。次に、土器を逆さにして胴部より上の粘土紐を積み上げ、化粧土の塗布とミガキ調整をおこなう。粘土紐同士の接合を強固にする作業は、基本成形段階で時間をかけて丁寧になでることによりおこなわれ、その間に乾燥が進む。器面調整などの整形作業と基本成形作業が、同時かあるいは交互におこなわれるという特徴がある。

タタキ技法使用（変形度小）

- ③ 粘土紐積み上げ段階で頸部を内傾させて大まかな形を作った後、叩いて器壁を締め、さらにヘラと指ナデで器面を整える。粘土紐を積み上げながら大まかな形を作るので、ここで施されるタタキ技法には大きな変形を伴わず、また、器表面調整を丁寧におこなうのでタタキ締め効果の大きくないことがわかる。
- ④ 基本成形では、粘土紐を積み上げて叩き、さらに粘土紐を継ぎ足して口縁部を作る。その後、内面からケズリ調整することによって胴部に膨らみを持たせつつ器壁を薄くし、外面にミガキ調整がおこなわれる。最後に底部をケズリによって丸底化する。

これら③～④の作り方に特徴的なのは、変形度の弱いタタキ技法が施こされる点と、基本成形→整形の順に分かれて作られている点である。

タタキ技法使用（変形度大）

- ⑤ 底部円盤に粘土紐を積み上げ、口縁部をなでて外側へ屈曲させる。乾燥後、土器を膝の上において胴部から底部を叩きながら変形させ、形を整えて仕上げる。
- ⑥ 底部円盤に粘土紐を積み上げ、口縁部を外反させてなでる。粘土紐積み上げ時に、補足の粘土紐を内側にも巻きながら積み上げる。乾燥後土器を膝の上ののせてタタキ技法を施し丸底の形に成形する。最後に文様を刻んだタタキ板で施文する。

⑤～⑥では、粘土紐積み上げ後にタタキ技法によって形を変形させ、ヘラ調整などによる入念な器面調整を施さずに完成させる。粘土紐積み上げの基本成形は丁寧におこなわなくても、タタキ技法によって粘土紐の接合を確実にし、器壁を締めて空気を抜き、完成形態へと変形させている。

タタキ技法の役割

以上のように、タタキ技法を用いない場合には、粘土紐の積み上げ段階で大まかな形を作り、時間をかけて入念に粘土紐の密着をよくする必要がある。さらに、器壁を締め、水漏れなどを防ぐため、器表面の穴をつぶすミガキやヘラなどによる調整が必要になる。これらの調整は、隙間なく施さなければ十分な効果が期待できないため、施すのに時間がかかる。逆に、しっかりと叩くほど、粘土紐の接合や器壁を締める役割をもタタキ技法によって補われるため、粘土紐の積み上げや器面の仕上げ調整に時間をかける必要がなくなる。⑤では、粘土紐の積み上げには時間をかけず、粘土紐の積み上げから口縁部成形までが一つの工程で約6分35秒、膝の上に土器を置き、少し持ち上げて叩く、胴部から底部の仕上げが3分40秒という速さで作られる。これら短時間の製作工程と一定の乾燥工程を繰り返し、約1日で土器は完成する。⑥でも、底部成形から粘土紐積み上げ、口縁部成形までで、約7分15秒、乾燥後、膝の上に土器を持ってタタキを施し丸底の形に成形する工程が約5分50秒、最後に文様をつけるタタキを施すのが5分程度である。乾燥時間を差し引くと、土器1個の製作に費やされた時間は、①で約半日、③で約1時間20分（最後の底部整形を除く）、⑤で10分ほど（仕上げの赤塗りを除く）であり、土器1個の製作にかかる時間の差が顕著である。

では、このような製作にかかる時間の違いは、何をもたらすのであろうか。製作工程の長い場合と短い場合を模式的に示したのが図 13 である。ひとつの工程の製作時間が長い場合は、製作過程で粘土の乾燥がすすむため、製作工程が終了した後、次の製作工程までの乾燥時間が短くなる。しかし、短時間で一つの工程を終了する場合、次の工程までの乾燥時間は必然的に長くなる。乾燥時間が長くなることによって、2 個目、3 個目と同じ工程で土器を一度に製作できることになり、効率化した分、土器の生産量を増やすことができる。従って、一つの製作工程にかかる時間の長短は、土器の生産量と生産システムの違いをももたらしうるといえる。このような視点でみると、タタキ技法以外にも大量生産に多く用いられる型成形やロクロ成形などもまた、基本成形、整形の時間を短縮させることができる技法である点に気づく。つまり、短時間で形をつくることのできる技法の導入や発達、生産の効率化にとって重要なポイントになることが改めて理解されよう。

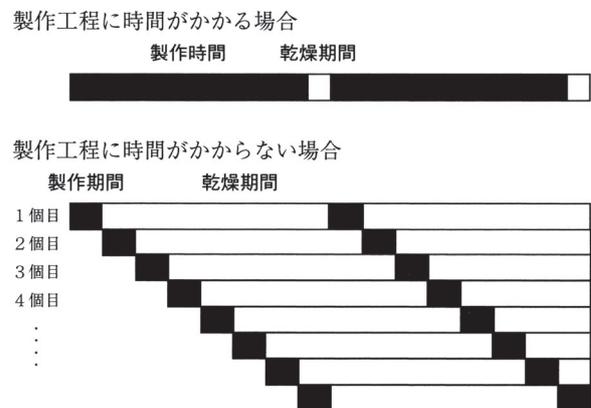


図 13 製作工程と製作時間 (長友 2007)

b. 土器の規格度と製作数 (長友 2008)

個人単位で土器製作をするタイ北部のチェンマイ近郊に位置するハンケオ (ライ・クアイ村) を中心に分析を試みた。筆者自身が製作者別に土器の規格度を計測し、同時におこなった観察記録とインタビューをおこなった。これをもとに、製作者の専門度を明らかにし、規格度との相関性について考察を行った。

計測した土器は、すべて同じ技法を用いて製作されている。土器製作者は、同じ器種を 15～25 個程度一度に作り、70～80 個程度になるとまとめて焼く。計測した土器は、一人の土器製作者が同一工程を繰り返すサイクルで製作された土器群を 1 グループとしており、焼成も同時に行なわれている。いわば非常に同時性の高い一括資料といえよう。このような条件の土器を 20 個ずつ計測し、その規格のばらつきを比較してみた。比較は同一器種同士でおこない、今回は、本来炊飯用として製作され、現在は遺骨入れなどとしても使用されるモーカオ (Mookao) と、副食調理用で使用されるモーケン (Mooken) という伝統的な器種について検討した。

その結果、表 4 のようにばらつきの少ない人とばらつきの大きい人という差が顕著にでた。そこで、ばらつき度合いの違いの生じた背景を探るため、土器の規格度と、「一年間に土器を製作する月」、「一月に土器を売る回数」、「製作する器種」との関係を表したのが表 5 である。

表 4 北タイ・ハンケオ村の土器規格度
モーカオ (長友 2008)

製作者	口径	頸部	胴部	器高	合計
J	0.44	0.48	0.52	0.66	2.1
P	1.15	0.84	1.35	0.7	4.04
S	1.59	1.5	1.23	1.41	5.72
B	1.68	1.55	1	1.69	5.9
Bu	2.14	1.27	1.44	1.08	5.93
D	1.84	1.62	1.62	1.52	6.6
W	1.59	1.84	1.95	1.33	6.71
D	2.22	1.83	1.65	1.39	7.09
C	2.68	2.33	1.83	0.76	7.61
A	2.1	1.73	2.22	1.74	7.81
Bo	2.92	2.65	3.31	1.62	10.51
Bo	4.09	2.4	3.66	2.94	13.09

モーケン

製作者	口径	頸部	胴部	器高	合計
U	1.32	1.42	1.53	1.02	5.28
P	1.56	1.66	1.49	1.19	5.9
Bu	2.14	1.27	1.44	1.08	5.93
K	4.09	2.4	3.66	2.94	13.09

表5 北タイハンケオ村の土器規格度と製作者の1年に占める製作月(長友2008)

*2005年調査時

規格度順		製作者	土器製作月/12月	年齢*	土器売り頻度	製作器種	備考
モーケン	モーカオ						
	1	J	12	47	5回/月	非伝統器種	並行して複数個体製作
	2	P	12	49	4回/月	伝統器種	
	3	S	12	69	3回/月	伝統器種	目が悪い・モーカオ1器種のみ製作
1		U	12	50	4回/月	非伝統器種	回転台使用
	4	B	10	54	4回/月	伝統器種	
2		P	10	54	7回/月	伝統器種	
3	5	Bu	10	55	3回/月	伝統器種	
	6・8	D	12	48	2回/月(村人・隣人が直接買いにくる)	伝統器種	目が悪い・夫が仲買人、隣人が直接土器を買いにくる
	7	W	10	53	不明	伝統器種	
	9	C	10	47	5回/月	非伝統器種	
	10	A	10	48	6回/月	伝統器種	モーカオとモーケンを同一工程内で製作
	11・12	Bo	10	53	4回/月	伝統器種	

モーカオで最も規格の高かった上位3人は、全て通年土器を製作する女性であった。最も規格の高かったJ(47歳)は非伝統的器種も作っている。2番目に規格の高かったP(49歳)は、伝統器種を主に製作している。3番目のS(69歳)は目が悪く、モーカオ1器種だけを製作しつづけている。モーケンの規格度が最も高かったUは、やはり土器製作を1年通しておこなう製作者である。この村では使用されることの少ない回転台を導入し、非伝統的器種を多く作っている。一方、モーカオで規格度が低かったのはBである。Bが住むのは、土器製作者の多いハンケオから200mほど離れた隣村のワオライ村(BanWaolai)である。村では、かつてハンケオのように土器製作が行なわれていたのであるが、土器製作者は減少し、2005年の調査段階ではほとんどいない状況であった。彼女は一年間に10か月間、乾季にのみ土器製作をしており、伝統的な器種を製作しているが、完成した土器を計測せずとも目視で規格のばらつきの大きいのがわかるほどであった。2番目に規格度の低かったAは、やはり一年のうち10か月間のみ土器製作をする。伝統的な器種を主に作るが、特徴的なのは、同一工程を繰り返す1つのサイクルの中で、モーカオとモーケンという異なる器種を製作するという点である。例えば、同じ大きさの底部から、第1工程でモーカオを5個、モーケンを10個作り、第2工程へ進むという具合である。完成品の規格のばらつきが大きくなる要因のひとつは、2種類の土器を同じ工程のなかで作るといような、不規則な製作工程をふむことにあると推測される。また、モーケンで規格度が低かったのは、1年に10か月間土器を製作する65歳のKである。

このように土器の規格度と土器製作者の様相をみると、一定の相関性が見えてくる。まず、1年を通して土器製作をする人のほうが、乾季のみ土器製作をする人よりも規格度の高い傾向が顕著である。そして、同一器種のみを作りつづける人も規格度は高い。また、12か月作り続ける人の方が回転台の導入などのコストダウンに努力を払い、大量生産する条件を整えている。これに対し、1年のうち10か月のみ土器を製作する人の土器規格度は相対的に低く、同一工程のなかで複数器種を作る方法で製作された土器も規格度が低い。

以上、民族学的調査による土器規格度と専業度との相関性についてみてきた。ここで、異なる地域の村の土器規格度を比較した研究成果を加え、規格度の差が生じる要因について整理してみたい。小林正史(1993)と小林青樹(1998)は土器の規格度を調べ、東北タイのムアンノイ村の方がフィリピンのカリンガ村よりも規格度が高いことを明らかにした。こうした土器規格度の比較は、技術の

異なった土器群同士を比較していることになる。カリंगाの土器製作は、外面にタタキをした後、ナデ調整やヘラミガキ調整を施し、内面にはヘラケズリ調整を施すなど、時間のかかる調整方法を採用し、さらに樹脂を塗布する（小林正史 1993）。これに対し、タイ東北部のムアンノイでは、ほぼタタキ技法と手や布によるナデ調整のみによって土器が形づくられ、短時間で変形、完成させる技術を獲得している。一日で焼成前の乾燥工程まで作りあげる個数は、カリंगाが5個程度なのに対してムアンノイでは20～30個であるという（小林青樹 1998）。

現在でも、東北タイの各土器製作村では基本的にこれと同じ技法を用いて野焼き土器が製作されており、2007年に調査したタイ東北部のモー村でも、1日20～30個程度の製作をおこなっていることが確認できた。このように、「技術」という側面からみても、ムアンノイのほうがカリंगाよりも、量産に適した技術を獲得しており、実際に1日に作る個体数も多い。したがって、1個の土器製作にかかる時間という視点から改めてみると、技術の異なる土器を比較した場合、その規格度の差は、すばやく大量に製作できる技術と、時間がかかり少数しか作れない技術（Nagatomo 2006）との差異を反映していると理解することができる。さらに同じ村内での製作者同士を比較すると、ひとりの製作者が1日につくる土器の個数の違いは、自然と、土器の規格のばらつきに影響することがわかった。これらの分析から、土器規格度の差異は、より量産化に適した土器製作技術を獲得しているかどうか、そして実際にどの程度の多くの土器を製作しているか、という差を反映している可能性が強い。

民族学的研究によると、「量産化を可能とする技術の獲得」、「製作個体数の多さ」、「1年における製作期間の長さ」は、土器の規格度と強く相関するといえる。そして、これらは土器の量産化に帰結する要素であり、專業度の発達に深く関連していると理解される。

大量生産品は規格性が高く、逆に少量しか作らないものほど個性豊かに作りやすいことは、民族例のみならずわれわれも日常的に経験している。生産コストの面からみても製作方法をパターン化した方が量産化しやすい。また、同じ形である方が、土器焼成においても土器設置や熱の火回りを均質にしやすくなる。そして、同じ粘土量や大きさである方が交換において不平等が生じにくくなり、交易品に適する。交易としての土器の比重が高まるほど生産個数が増加し、生産体制においても專業化へ向かうと推定されよう。つまり、土器の規格をそろえることは、生産コストの削減と生産物の価値の均質化において有効であるといえる。

考古資料の場合、遺跡から出土し短期間に廃棄されたと考えられる土器群の規格度は、当時その集落で消費されていた土器の規格度と言い換えることができるが、この土器群には複数の製作者によって作られた土器が含まれていることになる。このような土器群の規格度が高くなるのは、それぞれの土器製作者の作る土器の規格がそろっている場合、或いは、より少数の土器製作者によって集落の土器群が供給される場合であろうと推測される。一つの集落に供給される土器が少数の土器製作者による状況は、一人の土器製作者がより多くの土器を製作することによって達成されると想定される。したがって、民族学的研究成果と総合して考えると、考古資料の土器群の規格度は「量産化を可能とする技術の獲得」、「製作個体数の多さ」、および「1年における製作期間の長さ」と強く相関すると考えられる。

c. 土器の口縁部形態からみた製作者特定：個人認定（長友 2011）

タイにおいては、北タイと東北タイに大きな地域差があることが判明している（図14）。その差は、製作技法だけでなく、叩き板や当て具などの道具の形や土器の形態にも及ぶ。では、同一の製作技

法をもつ村の中で、製作者個人の差は認識できるのだろうか。そこで、最後の仕上げ方を反映しやすい口縁部を実測し、形態の比較をおこなったのが図 15 である。北タイのモンカオケオ村と東北タイのドンチック村のそれぞれで同じ調査をおこなった。

ドンチック村の G さん、D さん N さんの作った土器の口縁をみると、種類が違っても関わらず、同一製作者の作る口縁部形態が非常に似た形態的特徴を持つことがわかった。G さんは口縁端面が外側を向く形態に、D さんは内側を強くなでることではねあげたような形態に、N さんは内湾する形態になっている。他方、北タイのモンカオケオ村の M さんの作る口縁部は、内側の端を少し強くなでるため、端面が外側に向く形態をしている。X さんの作る口縁部は端面に明瞭な面がない。こ

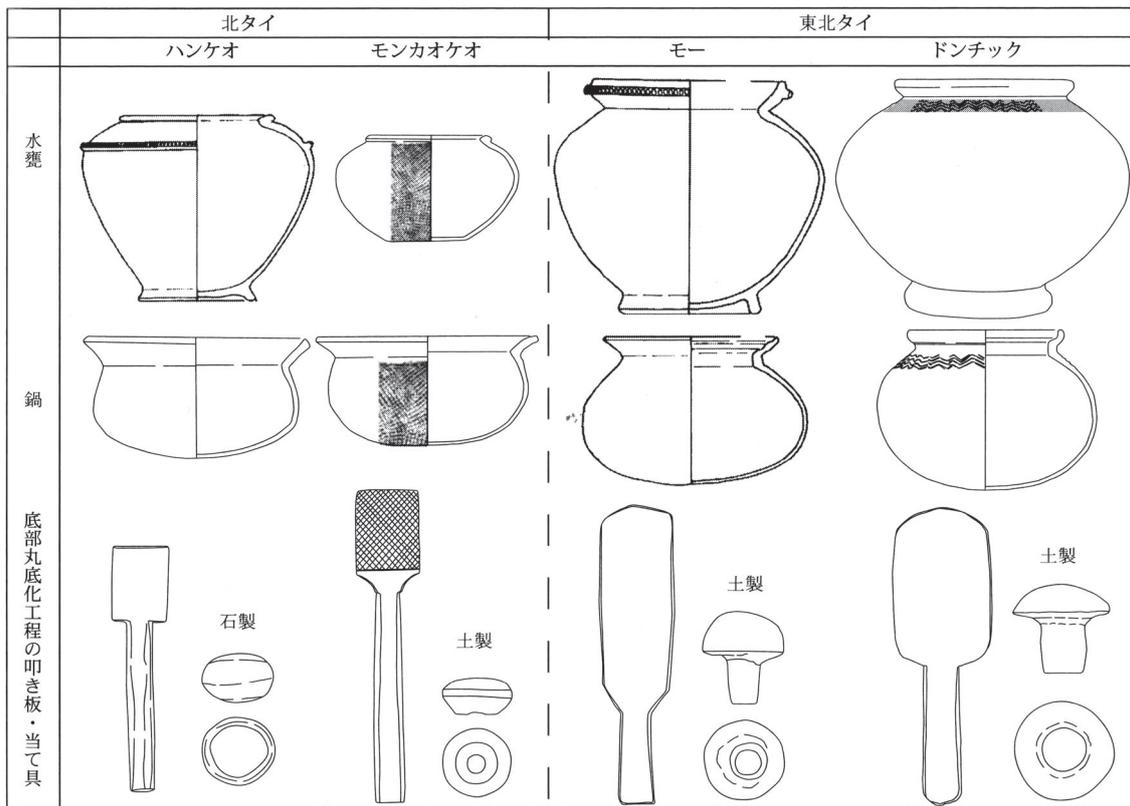


図 14 北タイと東北タイにおける土器および叩き道具の比較図 (長友 2011)
(水甕 S = 1/10、そのほかは S = 1/8、ドンチック村の水甕は写真外形をトレース)

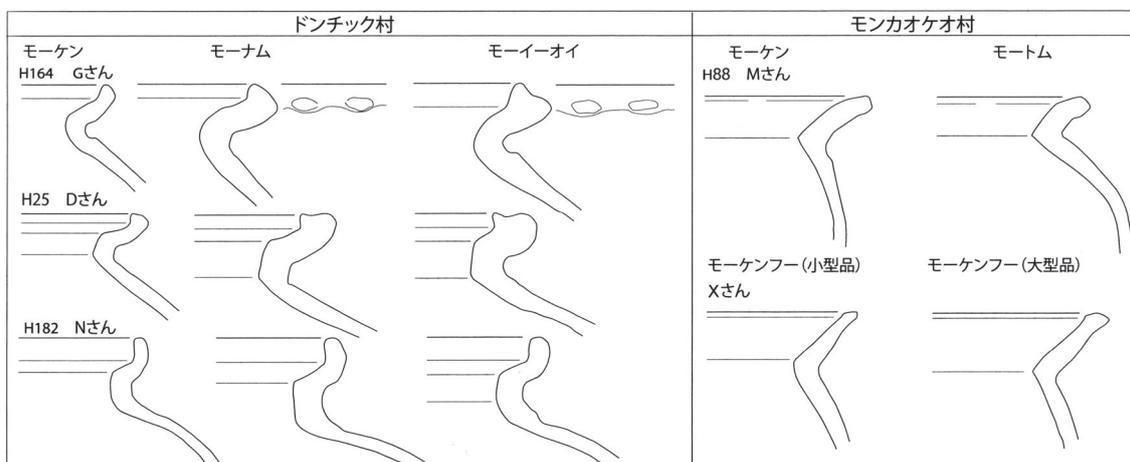


図 15 土器製作者別の口縁部形態比較 (長友 2011) (S = 1/3)

のように、口縁部形態は、考古資料の土器の時間的変化を調べるときに注目する場合もあるが、この調査では個人差が非常に大きくでることがわかった。

d. 野焼き方法の多様性と生業

野焼きと窯焼きの接点 (中村・長友 2016)

ミャンマーのバンダゴン村の調査を行った。各工房では、メザリカン村、レボエ村から土器製作者が集められ、土器の文様と器種については土器製作者の出身村のやり方にまかせる状況がみられた。ただし、注文によっては、例えば、インマ村の無文赤色磨研甕（飲料用）をメザリカン村出身者が模倣する場合もある。また、野焼きの方法は土器製作者でもあったオーナーの配偶者（妻）の意向が強い。メザリカン村では、同じ泥窯ながら、夕方から焼成し翌朝取り出すのに対し、バンダゴン村の工房では3日間焼成した。

メザリカン村やレボエ村の土器の焼成時の破損率は、聞き取りによると、3/100個であるのに対し、バンダゴン村では100/1000個が破損及び出荷できない土器である。また、窯で焼成した土器は40～100/500個が破損するという。雨でも土器焼成が可能であるが、前述したように必ずしも覆い型野焼きよりも効率が良いというわけではない。生産効率から考えると、メザリカン村の方法の覆い型野焼きが最も良いが、バンダゴン村の方法にこだわるのは、硬く焼き締められた製品が必要であるからとみられる。窯焼成品に類したさらに硬く焼き締められた土器を目指した結果、長時間の焼成方法を選択しているのであろう。

一方、中国・雲南省の曼閣村では、仏具を窯と覆い型野焼き（泥窯）で区別なく焼成する事例がみられたが（長友・中村 2011）、バンダゴン村の事例は窯と野焼きの両方で日常土器を焼成している点で珍しい。窯導入の初期には、在来の土器製作者が参入しうることを示す良い事例といえるだろう。また、轆轤成形と泥窯では緻密な胎土の土器が生産される傾向があり、この二つが窯焼成と親和性が高いことから、窯焼成導入前の土器胎土の質が、在地の土器製作者の窯への参入に相関すると理解されよう。

野焼きは土器製作者が焼成に関わるが、窯は焼成の担当が製作者とは異なる場合が多い。バンダゴン村の場合は、野焼き土器を製作する女性によって、窯焼成の土器も製作されていたが、窯焼きは土器製作村出身者ではない日雇いの男性が担当する。窯焼き技術は他地域からオーナーへ伝授されているが、実働は日雇いの男性である。つまり、土器製作者さえ確保できれば、窯焼きの技術継承者は少人数でよいことをこの調査事例は示唆している。

野焼き土器類型と生業の相関性 (Nagatomo 2015)

ミャンマーの土器製作は、徳澤啓一の指摘する通り（徳澤 2014）、土器の成形方法や製作道具には細かな村落差が認められるものの、共通性が高いことが当該調査でも確認できた。一方で、焼成方法は多様である。前述の通り、焼成に使用される燃料は村周辺で入手できるものを使用する 경우가多く、村の生業と密接に関連する可能性が想定される。また、違いの見出しやすい焼成方法において、その差が民族とどのように相関しているかについても検討できよう。そこで、焼成方法に着目し、当該調査とこれまでの調査事例を総合してミャンマーにおける土器焼成と生業および民族との相関性について、一定の見通しをたてたい。

これまでに調査成果が報告されている事例（津田 1999, Reith 2003, 徳澤 2014）から、土器の焼成過程が叙述されている事例を取り上げ、当該調査事例（Nagatomo 2015）を加えると、表6のようになる。調査村は、西から、西部のラカイン州2村、チン州1村、中央部のバゴー管区3村、マンダレー

表6 ミャンマーにおける土器焼成法の村比較 (Nagatomo2015)

地域	行政区	村	成形	焼成過程						密閉度	焼成(時間)	文献	
				土器の下の燃料			土器	土器を覆う燃料					
西部	ラカイン	Zeegaing	叩き	薪	藁			藁	籾殻	藁	△	不明	C. R. 2003
		Kinmaw	叩き	薪	少量の藁	層に積む		少量の藁			×	不明	C. R. 2003
	チン	Lente	不明	薪	乾燥パイン枝						×	9分	C. R. 2003
中部	バゴ	Chaug Kaung	不明	バガス(サトウキビ繊維)	牛糞			籾殻			△	9時間	C. R. 2003
		Kon Thar	不明	竹	牛糞	籾殻	藁	3層	おがくず		△	9時間	C. R. 2003
		Phaug Kan	不明					藁	泥		○	不明	
	マンダレー	Taung Gone	水引叩き	灰	土器層の間に薪並べる	周囲に牛糞・薪	2層	薪	少量の枝	土器周辺にパイン葉	△	1.5時間	T. N. 2015
		Tatkyi	水引叩き		樹皮			稲藁	パームの葉	灰	○	不明	徳澤2014
		Mezarikan	水引叩き	籾殻	竹	少量の木切れ	3層	周囲に竹、籾殻	藁	泥灰の混和物	○	3日後取出	徳澤2014 T. N. 2015
		Thi Pin Kan, Kon Thar	水引叩き		薪、枝			稲藁	泥(牛糞含)		○	不明	徳澤2014
		Thi Tat Kan	水引叩き		アカシアの枝	薪		藁	泥(牛糞含)		○	6, 7時間	C. R. 2003 徳澤2014
		Magwe	Thet	不明		乾燥牛糞			藁	泥	○	6, 7時間	C. R. 2003
		サガイン	Myin Daung	水引叩き		薪、枝			稲藁	泥(牛糞無)		○	不明
	Shwebo		水引叩き		藁と牛糞			藁	泥		○	5時間	津田1999
	Sagain		水引叩き		藁と牛糞			藁	泥		○	1日	津田1999
Na Bat	紐積叩き		灰	薪、小枝	牛糞		牛糞	藁	灰	○	不明	津田1999	
東部	シャン	Ye Cho	水引叩き	乾燥牛糞	稲藁		稲藁	泥(牛糞無)		○	不明	徳澤2014	
		Awe Yaw	不明	灰	竹	木片	周囲に竹片と木片	層に積む	灰	藁	泥(牛糞含)	○	不明
	Compani	紐積叩き	松の樹皮	藁	パイン樹皮を土器に立掛		草	牛糞と粘土の混和物		○	不明	C. R. 2003	
南部	タニンダーリ	Oh Loke Ashiat	不明	おがくず	竹		乾いた藁	湿らせた藁	土	○	1.5時間	C. R. 2003	

管区6村，マグウェ管区1村，ザガイン管区4村，東部のシャン州3村，南部のタニンダーリ管区1村である⁽⁷⁾。西部の少数民族の占める山間部，ビルマ族の多く占める中央部，さらに東部の少数民族の占める山間部，ビルマ族の居住する南部の村が含まれ，地理的にも幅広く，民族においても多様な村が対象となっていることがわかる。

これらの村では，轆轤を利用した水引き成形の後，叩き技法で形を整える事例が多い。しかし，中部サガイン管区のNa Bat村と東部シャン州のCompani村では，紐積み成形の後叩き技法で形を整える方法がとられ，異なる基本成形法の村もある。このうち，Compani村では回転台が用いられない。この村は，黒斑を消すために2度焼きをするなど，他の村とは異なる点が多い。また，西部のチン州Lente村でも，成形方法の詳細は不明ながら回転台を使用しない点が報告されている(Reith2003)。

土器焼成においては，土器製作者が敷地内に個別に焼成場所を設置するのではなく，村はずれの広場などに焼成場所のある場合が多い(ラカイン州の2村，サガイン管区のShwebo村，Sagain村，NaBat

村, マンダレー管区 Taung Gone 村他)。焼成時間をみると, 9 分で取り出す事例 (Lente 村), 1 時間 30 分程度の事例 (Taung Gone 村, Oh Loke Ashiat 村), 中部を中心とした 5 ~ 9 時間程度の事例 (Chaung Kaung 村, Kon Thar 村, Thi Tat Kan 村, Thet 村, Shwebo 村), 3 日後に取り出す事例 (Mezarikan 村) など差が大きく, 完成した土器の堅さに違いのあることも想定される。

そこで, 焼成方法を比較するために, 表 6 では, 土器焼成のための燃料や土器を設置した順に左から右へと配置した。基本的に, 土器を表す黒塗り部分よりも左が土器の下にある燃料, 右が土器に被せた燃料となる。この表をみると, 地面の直上に薪などの燃料が置かれる場合と, 灰の敷かれる場合のあることがわかる。灰を地面に敷く事例はしばしばみられるが, 北タイのハンケオ (ライ・クァイ村) では, 乾季には灰を敷かず, 雨季の土器焼成の場合にのみ灰を敷いており, 湿気を上にあげない効果があると考えられる。薪, 葉, 木片, 竹などの村周辺で入手できる樹枝と, 稲作によって生じた藁や粃殻, 耕作用の牛から採取した牛糞が燃料として用いられている。土器を覆う部分には, 藁, 粃殻, 草, 葉, おがくず, 竹, 牛糞などの燃料を被せる場合と, これに加えて燃料を灰や泥で覆う場合がある。土器の上に燃料のみを被せる場合, 炎が立ち上がり土器周辺の温度にはむらぐがやすい。また, 最高温度に達する時間は相対的に早くなる。これに対し, 灰や泥で覆うと酸素を閉じ込め炎を出さないため, 覆い内部の焼成温度をむらなく一定に保ちながら長時間かけて徐々に温度を上昇させることができる。こうした事実をもとに, 焼成方法を大きく 3 つに分類した (図 16)。点火前に燃料で覆わない I 類, 点火前に燃料で覆う II 類, 点火前に燃料で被覆しさらに灰あるいは泥で覆いをする III 類である。III 類は, 土器の下や間に入れる燃料の量を多くすることで, より長時間焼成することができるようになる。

点火後に草をかけるものの, 点火前に燃料をかけないチン州 Lente 村と, わずかな量の藁しかかけないラカイン州 Kinmaw 村を I 類に分類する (表 6)。藁と粃殻が被覆材となるラカイン州 Zeegaing 村と, 粃殻が被覆材のバゴー管区の Caung kaung 村, おがくずが被覆材となる同じくバゴー管区の Kon Thar 村, 薪と枝葉で被覆するマンダレー管区の Tuang Gone 村が II 類に分類される。泥や灰で被覆する III 類の場合には, その多くは, 藁で覆った後に泥あるいは灰を被せる。灰で覆うのはマンダレー管区 Tatkyi 村やシャン州の NaBat 村と少数で, 多くの場合は泥を用いる。泥には, 灰を混ぜる場合と牛糞を混和する場合, 混和しない場合がある (徳澤 2014)。

この土器焼成の分類に従って地域差をみてみよう。表 6 のうち, 位置の判明する村の分布を, 焼成方法の分類により示したのが図 17 (右) である。西部に I 類の村が偏在し, II 類は西部と中部の一部, III 類が中部から東部および南部に分布することがわかる。すなわち, 西部は密閉度が低く, 東部の方がより密閉度の高い土器焼成がおこなわれる傾向が強いといえよう。一方, これまでの調査で, 雲南省西双版纳におけるタイ族の曼斗村では泥で覆う土器焼成が, 北タイのチェンマイ近郊のハンケオ (ライ・クァイ村) やチェンライ周辺のモンカオケオ村では灰で覆う土器焼成が確認されている。ミャンマー東部のシャン州に多く居住するシャン族は, タイ系諸族であり水稻農耕を営む点で, 隣接する西双版纳や北タイとの共通性が高い (図 17 左)。

以上から, 次のように結論づけられる。土器製作は民族や生業に必ず

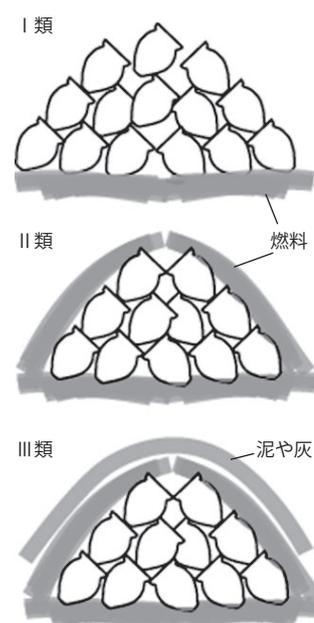
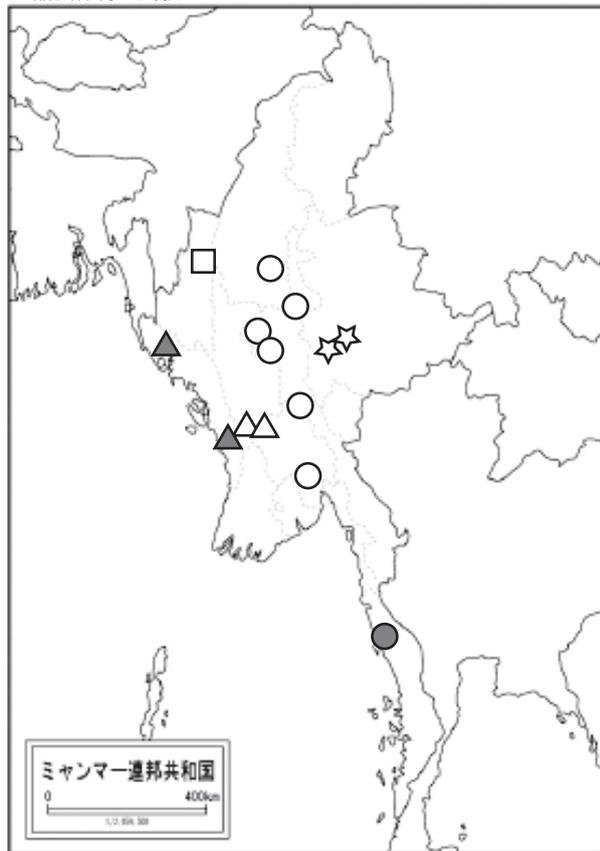


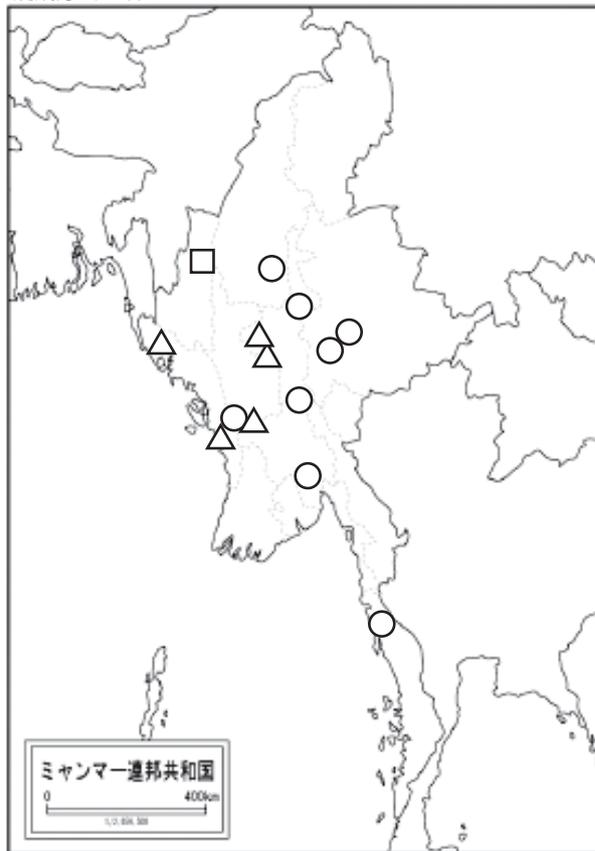
図 16 野焼きの類型
(長友 2015)

土器製作村の民族



○ Middle Burma ● Southern Buryuma △ Prome
▲ Arakan ☆ Shan state □ Chin Hill

焼成方法の種類



□ I類 (被覆なし) △ II類 (藁かおがくず、朽殻、薪)
○ III類 (藁+泥)

図 17 土器製作村の焼成方法 (右) と民族 (左) との相関性 (Nagatomo2015 より作成)

しも一致するとは言いきれないものの、土器製作の一部の要素は、一定程度、民族や生業と関係する。例えば、水稻農耕を行わない村では、藁を用いないので泥を塗るような密閉度の高い「覆い」を作らず、土器焼成は生業との関係が深い。調査を実施したタンゴン村では、米以外の作物の耕作をおこなう農村であるが、土器の上に薪を並べて点火するため、密閉度がやや低いII類の焼成となる。また、泥や灰で覆うIII類はシャン族、タイ族でよく採用されるため、現時点では明確ではないものの、雲南省まで民族的な関係で広がる可能性が想定される。ただし、III類の焼成方法は、焼成時間が長く硬質な土器に仕上がるので、窯焼成の陶器との接点にも注意する必要がある(長友・中村 2011)。従って、これが、民族的な要素で広がるのか、窯焼成の陶器との競合で生まれるのかは今後の調査で明らかとする必要がある。

3. 土器に関する民族考古学研究の方向性

以上のように、土器に関する民族考古学研究は、製作や焼成などの技術に加え、分業、生産といった課題に踏み込み、さらに土器が世代間でどのように継承されたか、文様や土器形態がどのような要因で変化するかなど、考古学者が想定はしていても実証できなかった土器型式の変化の背景を解き明かそうとしてきた。また、土器を用いた調理や主食と副食の関係など、伝統的米作りやその

変容過程、村の移住の背景など、土器使用の側面からさらに米作りや社会的動向へと研究課題の幅が広がっている。今後、考古学者が認識する「型式」や「系統」がはたして本当に集団差などを背景としており、型式変化と想定しているものが、時期差であるのかという本質的な問いかけもなされるだろう。

民族学的研究では、土器製作の動作を観察でき、土器変化の背景について聞き取りを手掛かりにしつつ実際に調べて検討ができる。脈絡の異なる考古資料へ何をどのように援用するのか、どこまでをケーススタディとして理解するのか、考古学への援用の方法も考える必要がある。その方法論をより徹底できれば、民族考古学的研究の役割は考古学において独自で大切な位置を占めることになるだろう。

付記

本稿は、2019年韓国考古学会での発表に加筆したものである。発表の機会を与えていただいた慶北大学校鄭仁盛先生に感謝申し上げます。なお、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤(C)(19K01008)による研究成果である。

参考文献

- M. モース 1976『社会学と人類学Ⅱ』有地亨・山口俊夫共訳、弘文堂
 佐藤宏之 1990「縄文時代狩猟の民族考古学一陥とし穴から一」『現代思想』18-12、pp.178-191
 佐藤宏之 1992『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
 浅川滋男・村田健一・大貫静夫・栗原伸司・坂田昌平・楊昌鳴・黄任遠 1997「北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究—黒龍江省での調査を中心に—」『住宅総合研究財団研究年報』23巻、pp.87-96
 長友朋子 2015『弥生時代 土器生産の展開』六一書房

土器に関する民族考古学文献（年代順）

【1990年より前】

- 鹿野忠雄 1941「紅頭嶼ヤミ族の土器製作」『人類学雑誌』第56巻第1号、pp.41-49
 佐原真 1970「土器の話（1）～（13）」『考古学研究』16（4）～21（2）、考古学研究会
 角林文雄 1978「ニューギニア・マダン周辺の土器作りとその経済的機能の研究」『民族学研究』43（2）、pp.138-155
 周達生 1979「中国タイ族の土器づくり 雲南省西双版纳タイ族自治州」『季刊民族学』3（2）、pp.74-79
 森淳 1980「土器を焼く部落 カメルーン西北部・バメッシング」『季刊民族学』4（1）、pp.102-122
 檜崎彰一・Leedom Leffers・Louise Allison Cort 1994「タイ北部の土器作り」『愛知県陶磁資料館研究紀要』13、pp.2-15

【1990年～2009年】

- 小林正史 1996「東南アジアの土器作り民族誌における工程間の結びつき」『立命館大学考古学論集』Ⅲ -2、pp.1043-1066
 大西秀之 1998「土器製作者の誕生：カンカナイ社会における技術の伝習と実践」『民族学研究』62（4）、pp.470-493
 大西秀之 1998「ルソン島北部・カンカナイ社会において形作られた土器製作者の身体」『物質文化』64、pp.1-28
 小林青樹 1998「土器作りの専門製作と規格性に関する民族考古学的研究—フィリピンとタイの事例分析を中心に—」『民族考古学序説』同成社、pp.122-138
 小林正史 2000「カリंगा土器の変化プロセス」『交流の考古学』朝倉書店、pp.134-179

- 後藤明 2001 『民族考古学』 情報考古学シリーズ、勉誠出版
- 樫崎彰一・Leedom Leffers・Louise Allison Cort 2000 「東南アジア本土における現代の土器および焼締陶の生産に関する地域調査」『研究紀要』第8号、瀬戸市埋蔵文化財センター、pp.105-192
- 時津裕子 2003 「伝統的土器製作者の認知技能—タイ王国を事例として—」『福岡発・アジア太平洋研究報告』12、pp.115-125
- 金子守恵 2005 「地縁技術としての土器づくり—エチオピア西南部アリ地域における土器の野焼き—」『アフリカ研究』67、pp.1-18
- 中園聡 2005 「東北タイにおける土器製作関連の物質文化資料—タキ板—」『地域総合研究』第32巻2号、pp.119-125
- 金子守恵 2006 「生業としての土器づくり：エチオピア西南部の土器づくりの地域間比較にむけて」『アジア・アフリカ地域研究』No.06-2、pp.522-59
- 徳澤啓一・小林正史・長友朋子 2006 「西南中国における伝統的土器づくりの変容—中華人民共和国雲南省西双版納族自治州の伝統的土器づくり村—」『岡山理科大学紀要』第42号B、pp.21-40
- 石村智 2007 「土器の喪失？オセアニアの場合」『土器の民族考古学』同成社、pp.111-122
- 大西秀之 2007 「フィリピン・ルソン島山地民の土器製作技術の一考察—語りえぬものの民族誌に向けて—」『土器の民族考古学』同成社、pp.27-42
- 小野林太郎 2007 「消えた土器と残った土器」『土器の民族考古学』同成社、pp.95-110
- 金子守恵 2007 「エチオピア西南部における土器職人のテクノ・ライフヒストリー：人生の軌跡に技術の変化をあとづける試み」『土器の民族考古学』同成社、pp.15-26
- 小林正史 2007 「稲作農耕民の覆い型野焼きの基本特徴とバリエーション」『土器の民族考古学』同成社、pp.63-80
- 小林正史・徳澤啓一・北野博司・長友朋子 2007a 「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける技術と生産様式の結びつき」『北陸学院短期大学紀要』第39号、pp.277-328
- 小林正史・徳澤啓一・北野博司・長友朋子 2007b 「北タイと東北タイの土器生産様式の違いを生み出した背景」『北陸学院短期大学紀要』第39号、pp.219-276
- 後藤明 2007 「東海インドネシア・マレ島における土器製作システム—＜海上・土器製作＝交易者＞システムに埋め込まれた土器製作—」『土器の民族考古学』同成社、pp.123-139
- 後藤明編 2007 『土器の民族考古学』同成社
- 庄田慎矢 2007 「土器成形と打捺板に関する民族誌考古学的研究—秦国 Mo 村の事例から—」『科技考古研究』13、亜州大学校博物館
- 角南総一郎 2007 「現代台湾における民族表象としての土器」『土器の民族考古学』同成社、pp.83-94
- 徳澤啓一・小林正史 2007 「東北タイにおける伝統的土器づくり技術とその継承—タイ王国マハサラカム県モー村の伝統的水甕製作を中心として—」『岡山理科大学紀要』第43号B、pp.11-30
- 徳澤啓一・小林正史・長友朋子 2007 「関于中国伝統陶器制作の変化—中華人民共和国西双版納族自治州的伝統陶器制作村—」『社会科学系研究』第5号、pp.11-22
- 長友朋子 2007 「民族誌事例から見た土器つくりと弥生土器生産体制」『土器の民族考古学』同成社、pp.43-61
- 徳澤啓一・小林正史 2008 「北タイにおける伝統的土器製作と OTOP —タイ王国チェンマイ県ハンドン郡ハンケオ地区の伝統的水甕製作を中心として—」『岡山理科大学紀要』第44号B、pp.13-32
- 中園聡 2008 「フィジーにおける土器製作と製作具」『九州と東アジアの考古学 - 九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集 - 下巻』 pp.949-959
- 中村真里絵 2008 「土器生産地にみる工場の運営と地域の論理：東北タイ・ダークウィアの事例から」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』 pp.262-262
- 長友朋子 2008 「弥生時代における土器生産の展開—民族事例との比較研究—」『考古学研究』55-2、pp.61-81
- 小林正史 2009 「蒸し調理が導入される背景：東北タイと北タイの調理民族誌の比較をもとに」『石川考古学研究会会誌』第52号、pp.65-100

中村真里絵 2009 「タイの土器製品の多様化に関する一考察—東北部・土器生産地の事例から」『日本考古学協会 2008 年度研究発表資料集』 pp.445-446

【2010 年以降】

北野博司・小林正史 2010 「東北タイの土器作りにおける道具の使い分けと器種・工程間の関連性」『東北芸術工科大学歴史遺産研究』 No.6、 pp.1-23

徳澤啓一・小林正史・北野博司・三坂一徳 2010 「ラオス中南部における伝統的土器製作と世代間比較—ラオス人民民主主義国サワンタケート県ブドン村の伝統的水甕製作を中心として—」『岡山理科大学紀要』 第 46 号 B、 pp.1-20

長友朋子 2010 「朝鮮半島における土器の技術革新と生産体制—民族事例との比較研究—」『待兼山論叢』 第 44 号、 pp.31-59

金子守恵 2011 『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の遅延技術—』 昭和堂

小林正史 2011 「東北タイ・ラオスにおける主食のモチ米とオカズ調理の結びつき」『日本文化人類学会第 45 回研究大会要旨集』 pp.199

中村大介・長友朋子 2011 「土器製作技術の保守性と変化—タイと雲南の土器民族事例から—」『土器と窯業の民族考古学』 ワークショップ、 関西大学高岳館

長友朋子 2011 「土器属性が何を反映するのか—弥生土器研究への応用を目指したタイの民族調査成果—」『日本考古学協会第 77 回総会研究発表要旨』 pp.54-55

長友朋子・中村大介 2011 「タイ及び雲南省の民族事例からみた土器製作技術の保守と変動」『古代学研究所紀要』 15 号、 明治大学古代学研究所、 pp.3-23

徳澤啓一 2011 「タイ南部における伝統的土器製作とその変容 - 新しい技術様式を受容と世代間の分業を中心として -」『東南アジア考古学』 31、 pp.39-52

徳澤啓一・中村大介 2011 「中国雲南省における伝統的土器製作とその地域差・民族差 - 新平彝族傣族自治州及び元江哈尼族彝族傣族自治県の比較を中心として -」『岡山理科大学紀要』 第 47 号 B、 pp.23-42

北野博司 2012 「タイ国ウボンラチャタニー県ドンチック村の土器作り」『東北芸術工科大学歴史遺産研究』 No.7、 pp.22-44

小林正史 2012 「東南アジア大陸部の伝統的土器作り技術の地域差を生み出した要因」『日本文化人類学会第 46 回研究大会発表要旨集』 pp.97

徳澤啓一 2012 「タイ中部における伝統的土器製作とその変容 - スコータイ県バン・ナー・ワットライの事例を中心として -」『東南アジアの伝統的土器づくり事例調査報告書 - カンボジア・フィリピン・タイ・インドネシア -』 (大阪大谷大学博物館報告書第 59 冊) pp. 107-137

徳澤啓一・片山浩子・張雪 2012 「中国雲南省 - ミャンマー国境地域における伝統的土器製作 - 潞西芒市寨及び福貢加車寨における中国領内の現地調査報告を中心として -」『社会情報研究』 10、 pp.153-168

徳澤啓一・北野博司・中村真里絵・平野裕子 2012 「ラオス北部における伝統的土器製作と焼き締め陶器製作 - ラオス人民民主共和国ルアン・パバーン県ファン・ルアン村の伝統的水甕製作を中心として -」『岡山理科大学紀要』 第 48 号 B、 pp.13-32

徳澤啓一・平野裕子・北野博司・中村真里絵 2012 「ベトナム北部からラオス北部にかけての焼き締め陶器製作及び土器製作の展開 - 焼き締め陶器製作の地域差と変容を中心として -」『東南アジア考古学』 32、 pp.43-56

徳澤啓一・Sureeratana BUBPHA 2012 「ラオス南部における焼き締め陶器製作及び土器製作の展開 - 土器様式及び技術様式の地域間交流関係の整理にむけて -」『社会情報研究』 10、 pp. 101-152

中園聡・太郎良真妃・平川ひろみ・川宿田好見 2012 「土器製作具のすり減りのプロセスの三次元的検討と製作者の身体技法—北タイの土器製作村の調査から—」『国際文化学部論集』 第 13 巻第 2 号、 pp.143-164

中園聡・平川ひろみ・川宿田好見・太郎良真妃・三辻利一 2012 「北タイ伝統的土器製作村の素地作り個人内安定性 - 蛍光 X 線分析を用いた検討を中心として -」『国際文化学部論集』 第 13 巻第 3 号、 pp. 235-254

石村 智・大西 秀之・角南 聡一郎 2013 「土器における生産・交換・象徴の諸側面：特集 土器の民族考古学」『物質文化』 93、 pp.1-15

北野博司・徳澤啓一・中村真理恵 2013 「ラオス・ルアンパバーンの地下式窖窯による焼き締め陶器生産—そ

- の技術と変容—』『東北芸術工科大学歴史遺産研究』No.8、pp.12-32
- 徳澤啓一 2013a 「マレーシア半島部における伝統的土器製作とその系譜—東南アジア大陸部と島嶼部の関係性を中心として—」『東南アジア考古学』33、pp.27-41
- 徳澤啓一 2013b 「西南中国及び東南アジア大陸部における伝統的土器製作の分業・協業関係の変容—製作者主体の移譲と非職能者の関与をめぐる—」『物質文化』93
- 中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・川宿田好見 2013a 「土器胎土における製作者の個人内変異と個人間変異—北タイの伝統的土器製作に関する蛍光 X 線分析—」『日本情報考古学会講演論文集』11、pp.115-121
- 中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・川宿田好見 2013b 「土器形態における製作者の個人内変異と個人間変異—北タイの伝統的土器製作から—」『日本情報考古学会講演論文集』11、pp.101-106
- 中村大介・長友朋子 2013 「北タイにおける土器製作の技術変化と社会環境」『埼玉大学紀要 教養学部』第49巻第1号、pp.145-155
- 川宿田好見・平川ひろみ 2013a 「土器製作者のリズムと動作—モーションキャプチャーを用いた身体技法の基礎的研究—」『情報考古学』19 (1・2)、pp.13-27
- 川宿田好見・平川ひろみ 2013b 「北タイにおける土器製作者身体技法の記録と解析—モーションキャプチャーを用いて—」『日本情報考古学会講演論文集』11、pp.87-92
- 平川ひろみ 2013 「土器製作者と製作道具の関係—土器製作用具に関する民族考古学的調査の検討から—」『日本情報考古学会講演論文集』11、pp.3-7
- 大西秀之 2014 『技術と身体民族誌：フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』昭和堂
- 川宿田好見・平川ひろみ 2014 「北タイにおける土器製作者身体技法の記録と解析（続報）—モーションキャプチャーの使用とその意義—」『日本情報考古学会講演論文集』12、pp.61-65
- 北野博司 2014 「タイ東北部における土器製作者の移住と技術伝播」『東北芸術工科大学歴史遺産研究』No.9、pp.1-18
- 徳澤啓一・兪恵 2014 「中国人民解放军進駐以前の泰族の伝統的土器政策—西双版纳傣族自治州における製作者の移動と身分階層を中心として—」『社会情報研究』13、pp.113-128
- 中園聡 2014 「土器胎土の個体内均質性—民族考古学・実験考古学・先史考古学的研究素材の蛍光 X 線分析—」『日本情報考古学会講演論文集』13、pp.98-100
- 中園聡・平川ひろみ・太郎良真妃・白井菜実 2014 「土器の粘土帯はいかにして作られるか？—北タイの伝統的土器製作村における土器製作過程の三次元形状記録と観察—」『日本情報考古学会講演論文集』12、pp.80-83
- 中村真里絵・徳澤啓一・北野博司 2014 「ラオス国ルアンパバーン近郊における土器および焼締陶づくりの継承—パンルアン村とチャン村の事例から—」『社会情報研究』12、pp.67-76
- 平野裕子・Nguyen Phuong Thuy・徳澤啓一 2014 「ベトナム北部における伝統的焼き締め陶器製作の民族誌—ソンラー省ムオンチャイン村におけるタイ族の焼き締め陶器製作を中心として—」13、pp.129-146
- 中村浩・池田榮史・長友朋子 2014 「ミャンマー・チャウミャウンの陶器生産について」『史学臺考古』第14号、大阪大谷大学文化財学科、pp.51-61
- 小林正史 2015 「南アジアの伝統的土器作りにおける男女の分業」『日本文化人類学会第49回研究大会発表要旨集』pp.117
- 平川ひろみ 2015 「土器の痕跡を読む—民族考古学的観点から得られた情報をもとに—」『日本情報考古学会講演論文集』15、pp.11-16
- Nagatomo Tomoko, 2015, Pottery Making in Myanmar, *15th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists*, In Université Paris Ouest Nanterre la Défense
- 小林正史 2016 「基礎研究としての炊飯民族誌の比較分析」『考古学ジャーナル』682、pp.10-14
- 小林正史・外山政子・北野博司 2016a 「ラオス・アタプー県オイ族の伝統的米作り」『北陸学院大学研究紀要』8、pp.159-184
- 小林正史・外山政子・北野博司 2016b 「ラオス・アタプー県オイ族の伝統的米作りの変容過程」『物質文化』96、pp.71-88
- 中村大介・長友朋子 2016 「ミャンマーにおける窯と野焼きの技術的接点」『日本考古学協会第82回総会研究

- 発表要旨』 pp.92-93
- 長友朋子・中村浩・池田榮史・飯田絢美 2016 「ミャンマーにおける土器製作」『大阪大谷大学紀要』 第 50 号、pp.77-100
- 平川ひろみ・中園聡 2016 「弥生土器製作者の身体技法—回転台と“人間ロクロ”の民族考古学的調査—」『日本情報考古学会講演論文集』 16、pp.52-56
- 平川ひろみ・中園聡・川宿田好見 2016 「土器製作におけるミガキ具—北タイにおけるミガキ石の民族考古学的調査—」『日本情報考古学会講演論文集』 16、pp.94-97
- 細谷葵 2016 「先史時代の堅果類加工再考 - 世界的な比較研究をともなう民族考古学をめざして」『古代』 138、pp.1-38
- 小野林太郎 2017 「鋸齒印文土器：オーストロネシア語族の拡散を語る土器」『貝塚』 72、pp.27-30
- 小林正史・外山政子 2017 「ラオス・オイ族における伝統的米品種の粘り気度の変化要因」『石川県考古学研究会会誌』 60、pp.15-36
- 中園聡 2017a 「弥生土器製作素材の採取地の民族考古学的・考古科学的検討—九州の弥生土器、タイ、フィジーの例を中心に—」『日本情報考古学会講演論文集』 18、pp.10-15
- 中園聡 2017b 「弥生土器製作と製作者—ミドルレンジとしての多角的検討にもとづく復元—」『理論考古学の実践 I 理論篇』 pp.279-304
- 平川ひろみ 2017 「北タイの伝統的土器製作村における土器製作具の実態と所有意識」『日本情報考古学会講演論文集』 18、pp.72-76
- 平川ひろみ・中園聡 2018 「同形態かつ異系統技法の土器をめぐる考古学的解釈の落とし穴—民族考古学と弥生土器—」『日本情報考古学会講演論文集』 20、pp.59-63
- 小林正史 2018 「ラオス・オイ族における米品種の早晚性、粘り気度、水田の水量の関連」『北陸学院大学研究紀要』 10、pp.41-58

(本学文学部教授)